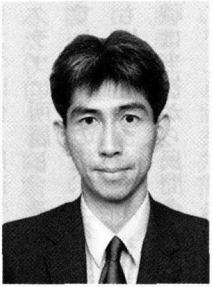
航空会社から大学の世界へ-国際交通論とは-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸崎, 肇 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15820

知の広場

航空会社から大学の世界へ：国際交通論とは

戸崎　肇
（とざき・はじめ）　商学部教授



（国際交通論）。

一九六三年生まれ。一九九五年京都大学大学院博士後期課程修了、博士（経済学）。日本航空株式会社、帝京大学経済学部専任講師、助教授、明治大学商学部助教授を経て現職。

主な著書は、『航空の規制緩和』（勁草書房）、『日本財政学』（芦書房）、『情報化時代の航空産業』『現代と交通権』（学文社）など。

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。以下、私の経験と学問分野についてお話します。みなさんのこれからの大学生活にとって、少しでも良き指針となれば幸いです。

私は大学時代、財政学を専攻しました。とはいえ、まじめとは程遠い学生でした。体育会のクラブに所属し、その練習やバイトに忙しく、一、二年の頃は学校にほとんどいきませんでした。その後、三年生になった頃から少しずつ専門の面白さに目覚め、大学に通う日数も増えていきますが、それでもまさか学者になろうとは夢にも思っていませんでした。

就職は当初から民間企業を考えており、様々なジャンルの会社の入社面接を受けました。そして、その結果、日本航空という航空会社に入社しました。世界中に飛行機を飛ばしたい、そのための交渉を航空会社の立場で行いたいというのが志望動機でした。入社後は、東京の羽田空港でチェックイン業務を行うなど、お客さまに第一線で接する仕事をしたり、旅行代理店を相手にしたセールス活動をしたりと、様々な経験をしましたが、あるきっかけから社会人大学院に入学し、学問の道に再度足を突っ込むことになったのです。

どうせ研究するのなら、自分が今働いている世界についてしっかり考えてみたいと、航空産業の研究をすることに決めました。当時、航空産業に関する研究は今ほど一般的なも

のではなく、参考文献などが少ないため苦労しました。しかし、実際にその業界で働いているということは、何にもまして力強い支援材料となりました。産業研究では、やはり、その内部でどのようなことが行われているのかを実際に知っているかどうかが大きな鍵となります。確かにヒアリング（現場の担当者などに直接、話を聞くこと）によって情報を得ることもできますし、むしろ客観的に状況を評価できるというメリットが、その業界で勤めたことのない研究者にはありますが、それでもやはり、生活をかけてその世界で生きるということは、外部からはうかがい知れない事情を生み出すのであり、それを知ることが、産業研究にとって大きな競争優位となるのです。

特に航空産業は労働問題が難しく、このあたりの事情をよく知らなければ、研究も机上の空論になってしまいます。みなさんも、将来どのような道を歩まれるにせよ、とにかくできるだけ色々な経験を積んで、それを将来に活かすことが重要だとアドバイスしたいと思います。

さて、航空産業を研究することは、一見マイナーなことのように思われますが、実は様々な学問領域にまたがるものであり、学際的な視点が求められる非常に面白い学問なのです。

まず、航空産業は、交通手段としての公共性を帯びています。したがって、航空輸送をいかに整備すべきか、ということは、公共政策、財政学という分野に関わってきます。たとえば、航空機を飛ばすためには空港がなければなりません。空港の建設費の半分程度は国が負担します。そうであれば、どこにどのような空港を建設するべきか、というのは国が決定していかなければなりません。ところが、これはやさしいことではありません。どの地方も空港を建設したいと思っています。また、国際的に見れば、韓国や中国、香港、マレーシア、シンガポールなど、周辺のアジア諸国では、巨大な空港が運営されており、日本の航空需要を奪おうとしています。しかし、日本にそれに対抗する空港を作るとなると巨額なお金が必要になりますし、そのお金をどのように調達するかは非常に難しい問題です。現在、日本は約七〇〇兆円もの財政赤字を抱え、ただでさえ運営が苦しいのに、高齢化社会の到来を迎え、年金をどうするのか、医療費をどうするのか、また情報化社会の到来にどのように対処していくのか、といった重要なテーマを数多く抱えており、そのためのお金も不足している状況です。このように厳しい財政状況の中で、どのように限られた資金を使って最大限の効果を空港建設に求めるか、ということを考えることは、日本の

将来の経済を大きく左右することになる大切なことなのです。

次に、航空会社間の競争がどのように行われれば、消費者にとって望ましいものになるかを考えることは、産業組織論という学問分野の話になります。この分野では、特に規制のあり方が問われます。航空産業では、安全性の確保という、非常に重要な命題があります。そのため、従来、政府は各種の規制を行って、安全が確保されるように配慮してきました。しかし、このような規制は、結果的に航空会社を競争の厳しい波から守ることになってしまい、経営の緩み、非効率化をもたらすことになってしまいました。そこで、どうすれば安全を確保しつつ、競争原理による効率化をもたらすことができるかが、重要な論点となったのです。こうして理論は精緻化され、世界的に規制緩和、規制撤廃が進んでいきましたが、それがどのように評価されるべきかは、いまだ結論の出ていない問題です。

さらに、航空産業では、パイロットやスチュワーデス、整備士といった様々な職種の人々が働いており、しかも日々厳しい労働環境と安全性を確保しなければならないという使命から、大変な苦労をしています。しかし、規制緩和による競争の激化によって企業の収益は厳しいものとなってきており、そうした人々の努力にどこまで報いることができるかは

難しい問題となっています。ここに経営学、労働経済学の考え方が導入されてくることになります。

その他、運賃の問題に関してはミクロ経済学、航空需要の掘り起こしといった観点からは地域経済学の観点が必要となってきます。このように、航空産業の研究は、非常に多くの学問分野にわたるものであり、その分、チャレンジングであり、面白いものだと思います。

私は、こうした航空産業の研究をベースに据えながら、明治大学では国際交通論という講座を担当しています。国際交通論では、さらに、人が移動することにどのような意味があるのか、また、国際化とはいったいどういうことを意味するのか、といったより根本的な問題から説き起こして議論を進めていきます。交通体系が分断されてしまえば、今日の社会はどうすることもできなくなります。二〇〇一年九月一一日に起こった米国の同時多発テロの時には、国際間の物流体系がストップしてしまい、国際経済は完全に麻痺してしまったといっても過言ではありません。また、トラックの働きがあってこそ、今のコンビニエンス・ストアの経営は成り立っています。こうした交通の社会的重要性が、現在、あ

まりにも過小評価されているような気がしてなりません。

明治大学は、その長い伝統の中で、こうした交通研究に先駆的に取り組んできました。日本全国どこを見回しても、交通研究にこれだけの多くの研究要員をおき、努力している大学は他にありません。こうした環境に、新入生のみなさんには是非興味を持って、この素晴らしい伝統を継承してほしいと思います。更に言えば、誰もがやっていない分野を研究することこそが、研究の醍醐味なのです。大学を出て社会に出ていくときに、自分はこのような誰もやっていないような分野の研究をこれだけやったんだ、と胸を張って言えることは、人生の大きな財産になると自信を持って言うことができます。それに、新しい分野であるからこそ、最先端に到達できる可能性も大きくなります。あなたも日本一の専門家を目指して努力してみませんか。この分野は、そうした可能性をも提供しているのです。いずれにせよ、本当の意味での個性を育てていくためにも、これまで述べてきた研究分野に是非アプローチしてください。駿河台キャンパスの国際交通論の授業では、きっとご期待に応えられるよう、いつでもみなさんの自主的な参加をお待ちしています。